

小札鋳留衝角付冑の変遷と その意義

Transitions in *Kozane Byōdome Shōkaku-tsuki* Helmets
and Their Significance

鈴木一有

SUZUKI Kazunao

はじめに

①小札鋳留衝角付冑の変遷

②衝角部の諸特徴

③共伴遺物からの検証

④マロ塚古墳例の編年的位置づけ

⑤結語

【論文要旨】

マロ塚古墳から出土した小札鋳留衝角付冑の製作時期を探るため、小札鋳留衝角付冑を衝角底板の連結手法と伏板先端の処理技法によって型式設定し、諸属性の分析によって各型式の製作段階を検証した。革綴衝角付冑との連続性を考慮して、小札鋳留衝角付冑を、Ⅲ式、Ⅳa式、Ⅴa式、Ⅴb式の合計4型式に分離した。さらに、①鋳頭形状、②地板枚数、③堅矧板使用の有無、④後頭部幅広小札使用の有無、⑤鋳構成枚数、⑥袖鋳もしくは最下段鋳後頭部抉りの有無、⑦鋳前端覆輪の有無、といった項目ごとに諸属性を比較した。これらの分析作業に、古墳の共伴遺物の検討を加え、小札鋳留衝角付冑の製作段階を、三つの段階に分けて理解した。第1段階はⅢ式の古相段階、第2段階はⅢ式の新相段階、第3段階は、Ⅲ式の最新相に加え、Ⅳa式、Ⅴa式、Ⅴb式の各型式がそろう段階である。このうち、マロ塚古墳から出土した小札鋳留衝角付冑は、第2段階から第3段階への移行期にあたと捉えられ、中期中葉から後葉（5世紀中葉から後葉）の所産と推定した。

小札鋳留衝角付冑の製作段階は、5世紀の前葉から後葉までの時間幅の中で推移している。小札鋳留衝角付冑の分析を通じて、鉄製甲冑における鋳留技法の導入から定着までの変遷過程が明確に整理できた。小札鋳留衝角付冑の型式変遷には、革綴冑の製作技法や形態を引き継ぎつつ、鋳留冑として製作しやすい技法や形態へ変化する様相がうかがえる。形態変化の背後には、眉庇付冑の製作技法との関連も散見でき、今回取り上げた属性分析や、共伴遺物による検証は、横矧板鋳留衝角付冑の検討にも応用できる。本稿の整理により、眉庇付冑や横矧板鋳留衝角付冑の変遷を視野に入れつつ、鋳留技法を用いる冑の変遷を総合的に検討することが可能になった。

【キーワード】 マロ塚古墳、衝角付冑、属性分析、鋳留技法、5世紀

はじめに

熊本県マロ塚古墳出土遺物に含まれる小札鉸留衝角付冑は、そのたぐい稀な遺存状態から、従来の甲冑研究手法では明らかにしえなかった数多くの製作技法上の特徴が看取できる。その成果は、報告の中で明確にしたとおり、裁断などの鉄板加工技術からはじまり、穿孔技術や組立工程など、多岐にわたる。こうした細かな製作技法の検討は、すべての出土品において可能という訳ではないが、技術史的な変遷を辿るうえでも、本例の編年的位置づけを明確にする作業が必要である。

本稿では、こうした問題意識から、小札鉸留衝角付冑の変遷を、個体そのものの属性分析と共伴資料によって整理する。この作業を通じ、マロ塚古墳出土の小札鉸留衝角付冑の位置づけを明確にしていきたい。

①……………小札鉸留衝角付冑の変遷

小札鉸留衝角付冑は、鉸留技法導入期の初期から登場し、鉸留技法が定着した後まで比較的長期にわたり製作された衝角付冑の主要系列の一つである。現在までに30例ほどが知られているが、ここでは実測図が公表されているものに加え、筆者が現物を確認し、ある程度の詳細がうかがえる26例について検討を加えておきたい(表1)。

研究小史 小札鉸留衝角付冑にかかわる研究は、末永雅雄による形式認識[末永1930]、製作技法の復元的検討[末永1934]に始まる。その後、村井崑雄によって小札鉸留衝角付冑にかかわる個別の特徴が実測図を交えて詳述され[村井1974]、基礎資料の充実がはかられた。さらに、小林謙一[小林1974a]や野上丈助[野上1975]によって、製作技法の変遷が整理され、現在に至る研究の基礎が築かれた。両者の変遷観は、微妙に異なるものの、資料が増加した現在においても、観察視点の有効性は失っていない。本稿で示す変遷観も両者の研究視点の延長上にある。また、近年では、山田琴子が横矧板鉸留衝角付冑との関係を整理している[山田2002]。

諸属性の抽出 小林や野上が整理したとおり、衝角付冑の編年的位置づけを検討するうえで最も重要な要素は、衝角底板の連結手法である。後述するように、衝角底板の連結手法は、革綴製品から鉸留製品まで縦断的に変遷を追うことができる。また、衝角底板の連結手法のほかにも、小札鉸留衝角付冑における製作時期の変遷がうかがえる諸属性として、①鉸頭形状、②地板枚数、③堅矧板使用の有無、④後頭部幅広小札使用の有無、⑤鋸構成枚数、⑥袖鋸もしくは最下段鋸後頭部抉りの有無、⑦鋸前端覆輪の有無、といった項目があげられる。このほか、衝角底板の形状や伏板先端の処理手法、豎眉庇の形状なども重要な属性であるが[山田2002]、分析に耐えうる資料が少ない上、形態的にも多様であることから、これらの要素については補助的に検討したい。

型式設定 衝角底板連結手法は、衝角付冑の製作時期をうかがう上で最も重要な要素であり、この差異をもとに衝角付冑の型式を設定することができる。以下、詳細を検討しておこう。

小札鉸留衝角付冑にみられる衝角底板連結手法については、衝角部寄りの腰巻板の幅を広げて造り折り曲げて底板と接する「上接式」(I手法[小林1974a]、腰巻打出・上接式[野上1975])、腰

表1 小札鉸留衝角付冑と関連資料

資料名	底板 連結 手法	伏板 先端 処理 手法	型式 名	鉸		地 板						鉸							
				突出 鉸	円頭 鉸	上段地板			下段地板			衝 角 部 堅 矧 板	合 計 枚 数	後 頭 部 幅 広 小 札	構 成 枚 数	袖 鉸	最 下 段 抉 り	前 面 覆 輪	鉸 分 類 名
						左	後	右	左	後	右								

堅矧板鉸留衝角付冑 (A類)

兵庫県 茶すり山	上接式	折曲	Ⅲ	×	○	6	1	6	同左			×	13	×	3	×	×	×	A1
----------	-----	----	---	---	---	---	---	---	----	--	--	---	----	---	---	---	---	---	----

堅矧板鉸留衝角付冑 (B類)

京都府 久津川車塚1号冑	上接式	折曲	Ⅲ	×	○	14	1	16	同左			×	31	×	—	—	—	—	—
大阪府 七観 末永報告5号冑	上接式	折曲	Ⅲ	○	×	19	1	17	同左			×	37	×	2	×	×	×	A1

堅矧板鉸留衝角付冑 (C類)

大阪府 狐塚	上接式	折曲	Ⅲ	×	○	1	1	1	同左			×	3	×	2	○	×	×	B1
徳島県 恵解山1号	上接式	折曲	Ⅲ	×	○	3	1	3	同左			×	7	×	4	×	×	×	A1

小札鉸留衝角付冑

京都府 久津川車塚2号冑	上接式?	折曲?	(Ⅲ)	○	×	9	1	8	(10)	1	10	×	(39)	×	—	—	—	—	—
京都府 久津川車塚5号冑	上接式?	折曲?	(Ⅲ)	○	×	9	1	(9)	10	1	9	×	(39)	×	—	—	—	—	—
大阪府 珠金塚南塚(A)	上接式	折曲	Ⅲ	×	○	14	1	14	14	1	14	×	60	×	5?	○	×	×	B1
大阪府 珠金塚南塚(B)	上接式	折曲	Ⅲ	○	×	10	1	10	14	1	14	×	50	×	3?	×	×	×	A1
兵庫県 雲部車塚	上接式	折曲	Ⅲ	○	×	13	1	11	14	1	14	×	54	×	2?	×	×	×	A1
兵庫県 伝雲部車塚	上接式	折曲	Ⅲ	○	×	12	1	12	(12)	(1)	(12)	×	(50)	×	—	—	—	—	
京都府 岸ヶ前2号	上接式	折曲	Ⅲ	×	○	18	1	18	20	1	21	×	79	×	3	×	×	×	A1
福岡県 堤当正寺	上接式	折曲	Ⅲ	×	○	19	1	19	19	1	19	×	80	×	4	×	×	△	A1
大阪府 御獅子塚第2主体	上接式	折曲	Ⅲ	×	○	17	1	17	17	1	17	×	72	×	4	○	×	×	B1
熊本県 マ口塚	上接式	折曲	Ⅲ	×	○	20	1	22	23	1	21	×	88	×	—	—	—	—	
奈良県 市尾今田1号	上接式	折曲	Ⅲ	×	○	15	1	15	16	1	16	×	64	×	—	—	—	—	
福井県 饑頭山	上接式	折曲	Ⅲ	×	○	—			—			—	—	—	—	—	—	—	
福岡県 新原・奴山1号	上接式	折曲	Ⅲ	×	○	—			—			—	—	—	—	—	—	—	
千葉県 姉ヶ崎二子塚	上接式?	折曲?	(Ⅲ)	×	○	—			—			×	—	—	—	—	—	—	
奈良県 円照寺墓山1号	上接式	折曲?	Ⅲ	×	○	(20)	1	(20)	(20)	1	(20)	×	(82)	○	3?	×	×	○	A2
兵庫県 法花堂2号	上接式	折曲	Ⅲ	×	○	18	1	18	19	1	20	×	77	○	4	×	×	○	A2
岡山県 正崎2号	上接式	折曲	Ⅲ	×	○	(18)	1	(18)	(21)	1	(21)	×	(80)	○	3	×	○	○	C2
宮崎県 島内115地下式横穴	上接式	折曲	Ⅲ	×	○	21	1	20	23	1	22	×	88	○	4	×	○	○	C2
奈良県 新沢281号	内接式	折曲	IVa	×	○	12	1	12	14	1	14	×	54	×	3	×	○	○	C2
宮崎県 堅山	内接式	折曲	IVa	×	○	(34)	1	(34)	(34)	1	34	×	(138)	×	4	○	×	×	B1
大阪府 唐櫃山	内接式	折曲	IVa	×	○	—			—			—	—	—	—	—	—	—	
奈良県 今井1号	内接式	折曲	IVa	×	○	17	1	17	20	1	18	×	74	○					
福井県 西塚	一連	折曲	IVa相当	×	○	(23)			(32)			×	(55)	×	—	—	—	—	
群馬県 鶴山	外接式	折曲	Va	×	○	16	1	17	20	1	20	×	75	○	3	○	×	○	B2
茨城県 武具八幡山	外接式	切断	Vb	×	○	—			(25)	1	—	×	—	—	3?	—	—	—	
宮崎県 島内1号地下式横穴	外接式	切断	Vb	×	○	20	1	21	23	1	23	×	65	○	—	—	—	—	

○:存在する △:存在する可能性がある ×:存在しない —:不明 空欄:未確認 ():推定

型式設定 衝角底板連結手法 Ⅲ:鉸留上接式 IV:鉸留内接式 V:鉸留外接式

伏細先端処理方法(Ⅳ・Ⅴ式に適用) a:伏板先端折曲 b:伏板先端切断

上記の分類を組合せ、鉸留衝角付冑をⅢ式、Ⅳa式、Ⅳb式、Ⅴa式、Ⅴb式に細分

使用鉸 突出鉸:鉸高が鉸径の2/3を超え、突出度が高いもの
円頭鉸:鉸頭の断面形が半円形もしくは緩やかな円弧を描くもの

板鉸分類 板鉸a類:下端が水平で特別な造作がないもの
板鉸b類:袖鉸をもつもの
板鉸c類:最下段の後頭部に抉りがいれられるもの
板鉸1類:前端に革覆輪が施されないもの
板鉸2類:前端に革覆輪が施されるもの
上記の分類を組合せ、板鉸a1~c2類に分類する

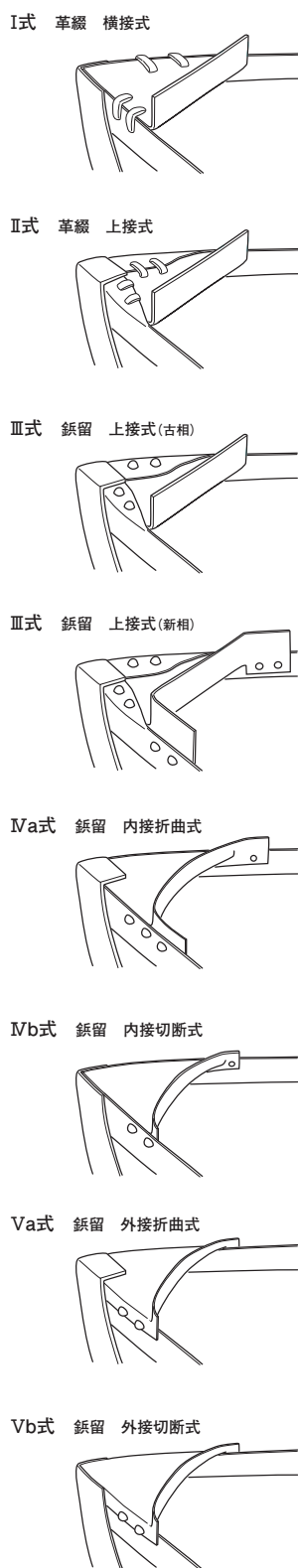


図1 衝角付胃の諸型式

卷板に特別の造作がなく、衝角底板の側面に糊代部分を設けて腰巻板の内側と接する「内接式」、外側に接する「外接式」がある。内接式と外接式には、伏板先端を折り曲げるものと切断するものが知られ、それぞれ、「内接折曲式」(Ⅱ手法 [小林 1974a], 内接・A 先端折り曲げ式 [野上 1975]), 「内接切断式」(Ⅲ手法 [小林 1974a], 内接・B 先端切断式 [野上 1975]), 「外接折曲式」(小林, 野上分類には該当なし), 「外接切断式」(Ⅳ手法 [小林 1974a], 外接式 [野上 1975]) と呼び分けることができる。

ここでは、先に三角板革綴衝角付胃をⅠa式からⅡb式の4型式に分類したこと [鈴木 2012] を継承して、鉾留技法の上接式をⅢ式、内接式をⅣ式、外接式をⅤ式としたい。さらに、伏板先端の処理方法のうち、折り曲げるものをa類、切断するものをb類とし、両者の技法が確認できるⅣ・Ⅴ式に対応させて、Ⅳa式(内接折曲式)、Ⅳb式(内接切断式)、Ⅴa式(外接折曲式)、Ⅴb式(外接切断式)と細分する。

型式変遷 後述する各属性の変遷の傾向から、これらの諸型式はⅢ式→Ⅳa式→(Ⅴa式→)Ⅳb式・Ⅴb式の順で出現したと捉えられる。以下、この型式分類をもとに、先にあげた衝角付胃の諸属性①～⑦に着目し、詳細な製作技法の変遷をあとづけておこう。

①鉾頭形状 小札鉾留衝角付胃で確認できる鉾には、突出度大きい突出鉾と、通有の断面が円頭形を呈する円頭鉾、鉾頭が扁平にされる扁平鉾の3者が認められる。このうち、扁平鉾は部分的に用いられるもので、胃全体に使用されることはない。小札鉾留衝角付胃に主体的に用いられる鉾は突出鉾と円頭鉾の2種といえるだろう。

突出鉾には、平面形が正方形で鉾頭が四角錐状を呈するもの(角錐鉾)や、鉾頭断面が円錐(紡錘)形であるもの(円錐鉾)が知られる。これら突出鉾は、鉾頭が型打ちではなく手打ちによって製作された可能性が指摘され [塚本 1993], 比較的初期に製作されたとみられる胃に用いられていることが知られている。とくに、京都府久津川車塚5号胃 [小泉・樋口 1999] のように鉾の垂下に支障をきたさないように腰巻板には扁平鉾が用いられる個体が知られ、意識的に突出鉾を使用していることが明確である。

突出鉾の認定は、遺存状態が良好でないといふ困難である。突

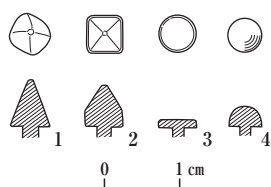


図2 鋸頭の諸例

突出鋸:1・2 扁平鋸:3 円頭鋸:4
 1. 雲部車塚 2・3. 久津川車塚
 5号冑 4. 青塚

出鋸の判定基準を直径より高さが上回るものとするのも一案であるが[塚本1993],先の久津川車塚5号冑をはじめ,明らかに突出した形態の鋸をもつ多くの事例がこの基準を満たさない。ここでは,鋸頭高と直径(一辺)の比率が $2/3$ 以上で,稜線が明瞭だったり,断面が山形であったりするような,円頭鋸と比べて明らかに突出した印象を受けるものを突出鋸と捉えたい。

表1にあげた事例のほか,突出鋸をもつ衝角付冑の典型例として,兵庫県雲部車塚古墳出土の三角板鋸留異形衝角付冑[京都大学総合博物館1997]をあげておきたい。この冑に用いられた鋸は,高さ 0.5 cm に近く,鋸留衝角付冑に用いられた鋸の中でも最も突出度が大きい。扁平鋸も,腰巻板にとどまらず,下段地板にも用いられ,突出鋸と扁平鋸の使い分けが明確な事例といえる[鈴木2002]。

②地板枚数 小札鋸留衝角付冑の地板枚数については,法則性を見出しにくい。京都府久津川車塚1号冑や[小泉・樋口1999],大阪府七観古墳1913年出土5号冑[杉井・上野(編)2012]など小札鋸留衝角付冑と外観上の共通性が高い⁽²⁾堅矧板鋸留衝角付冑が小札鋸留衝角付冑の形態的な起源と考えるなら,一段あたり,31枚(久津川車塚例)もしくは37枚(七観古墳例)程度が古式の形態を継承している地板枚数といえる。この数値は,2段分の合計地板枚数に換算すると,62枚,ないしは74枚となるが,表1の比較からも明らかなおと,必ずしも,こうした数値の範疇に収まる小札鋸留衝角付冑が古いものばかりではない。

京都府久津川車塚2・5号冑[村井1974,小泉・樋口1999]の事例が示すとおり,上下2段の地板枚数合計が40枚以下の幅広の小札を用いる事例が最古級の小札鋸留衝角付冑に知られている。久津川車塚2・5号冑はともに地板枚数が上下もしくは左右で異なっており,堅矧板鋸留衝角付冑との違いがみられることは注意してよいだろう。

いっぽうで,堅矧板鋸留衝角付冑との技術的な関連がうかがえる小札鋸留衝角付冑も存在する。通常,小札鋸留衝角付冑は下段地板が上段地板と比べて枚数多いが,大阪府珠金塚南塚(A)例[末永編1991]や,福岡県堤当正寺古墳例[松尾編2000],大阪府御獅子塚古墳第1主体例[柳本2005]など,小札の使用枚数が上下で一致するものも知られる。こうした事例は小札鋸留衝角付冑の中でも比較的製作段階が古いものに限定できそうである。

以上のことから,小札鋸留衝角付冑の出現期における小札枚数は,合計40枚程度から合計80枚程度まで,比較的多様であったことが分かる。小札枚数が比較的少ない独自の系列のほかに,小札枚数が比較的多く,堅矧板鋸留衝角付冑との技術的な連続性がみられる系列が並存していることが知られる。

地板枚数の数の比較は,傾向として製作時期の新古を示す指標とはいいがたい。必ずしも製作時期が古い製品の小札枚数が多い訳ではなく,その逆も成り立たない。また,上下段の地板枚数が一致するという特徴は古相を示すといえるが,最古相の小札鋸留衝角付冑に共通する属性ではない。

現在知られる資料で,最も多くの小札が用いられた事例は,宮崎県檜山古墳例[橋本2003]である。この個体は欠損部分が大きいので,正確な小札の枚数は不明であるが,上下段の合計枚数は130枚

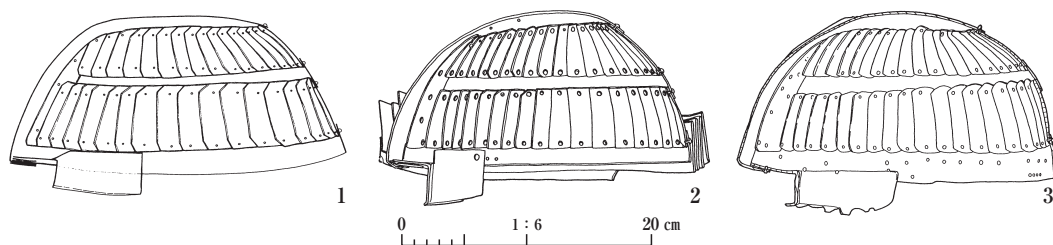


図3 衝角部に縦矧板を使用する小札鉾留衝角付胄

1. 珠金塚(南榔) 2. 御獅子塚(第1主体) 3. 堤当正寺

をこえると考えられ、最も小札枚数の少ない個体と比べると、3倍以上の数の小札が用いられている。檜山古墳例はⅣa式(内接折曲式)であり、Ⅲ式(上接式)よりも後出的な製品といえる。こうした極端に小札使用枚数が多い事例は、形態的な規範から逸脱したものといえ、新しい時期にみられる傾向と評価できるだろう。しかし、このほかのⅣ式やⅤ式の小札鉾留式衝角付胄の小札枚数は上下段合計50～80枚程度であり、Ⅲ式にみられる数量と大きな差がない。小札使用枚数が100枚をこえるような特徴は新しい様相と評価できるが、新相の製品に共通する属性とはいえない。

③縦矧板の使用 先述のとおり、小札鉾留衝角付胄には、大阪府珠金塚南榔(A)例や、福岡県堤当正寺古墳例、大阪府御獅子塚古墳第1主体例など、上下の地板枚数が一致するものがわずかに知られる。これらの個体は、いずれもⅢ式(上接式)であり、最も衝角寄りの地板に縦矧板が用いられているということでも共通する。縦矧板を用いることが明確に示しているように、これらの小札鉾留衝角付胄にかんしては、縦矧板鉾留衝角付胄との形態的、技術的関連を見出してよいだろう。小札枚数が上下段で一致することや、衝角寄りに縦矧板をもちいる技法は、小札鉾留衝角付胄のなかでも比較的古い段階にみられる特徴といえる。ただし、上下段の地板枚数が一致する事例の評価と共通するが、縦矧板を使用することは、最古相の小札鉾留衝角付胄に共通する属性ではない。むしろ、上下段の地板枚数の一致と、衝角部の縦矧板の使用は、技法的な関係が深く、縦矧板鉾留衝角付胄B類の系譜に連なる小札鉾留衝角付胄の一列にみられる特徴と評価できるだろう。

④後頭部幅広小札 小札鉾留衝角付胄の中でも古式の製品は、小札の幅が衝角部から後頭部までほぼ同様の幅である。こうした地板の意匠は、縦矧板衝角付胄にも共通し、鉾留技法導入期からみられる共通の形態規範があったことが分かる。いっぽう、製作時期が比較的新しいとみられる小札鉾留衝角付胄には、後頭部の小札のみ、通常の小札1枚分より明らかに幅が広くされているものが知られる。後頭部の小札が幅広にされるのは、上下両段である場合と、下段地板のみである場合がある。これは、下段地板の小札枚数が上段地板と比べ多くなる傾向があり、上下段における小札使用枚数の差異を少しでも少なくする意識がはたらいっているためと捉えられよう。

後頭部に幅広の小札を用いる小札鉾留衝角付胄はⅢ、Ⅳ、Ⅴ式にみられるが、製作時期が新しいと捉えられるⅣ式やⅤ式に高頻度でみられることは留意してよい。後頭部に幅広の小札を用いるⅢ式の小札鉾留衝角付胄も、奈良県円照寺墓山1号墳例〔末永1930〕や岡山県正崎2号墳例〔宇垣・高畑編2004〕など、Ⅲ式の中でも比較的新しい段階とみられる製品に知られる。以上のことから、後頭部に幅広の小札を用いる特徴は、小札鉾留衝角付胄の中でも新しい様相と評価してよいだろう。

なお、後頭部に幅広の小札を用いることは、宮崎県小木原1号地下式横穴例〔茂山ほか1982〕や京都府原山西手古墳例〔村井1974〕、奈良県新沢115号墳例〔伊達編1981〕、大阪府黒姫山古墳11号冑〔末永・森1953〕、長野県溝口の塚古墳例〔佐々木・渋谷ほか2001〕、兵庫県宮山古墳第3主体例〔松本・加藤1972〕、千葉県布野台遺跡例〔平野1989〕など、横矧板鉾留衝角付冑の一部にもみられる。横矧板鉾留衝角付冑における幅広小札使用の盛行時期は、Ⅲ式からⅣ・Ⅴ式への移行期に相当し、小札鉾留衝角付冑の事例と共通する。後頭部に幅広の小札を用いる技法は、横矧板鉾留衝角付冑との製作技法上の関連を示すものとして捉えられる可能性がある。

⑤**鍔構成枚数** 鍔は冑本体とは別づくりであることから、後世の補遺や改変などが行われる可能性がある。しかし、古い時期に製作された冑に新しく別の鍔を付け替えた痕跡がみられる事例は殆ど無く、鍔の大部分は冑の製作時と同時につくられたものと判断できる。冑本体の製作時期をうかがう上でも、鍔の特徴は重要である〔古谷1988〕。以下、鍔の属性として、⑤鍔構成枚数、⑥袖鍔もしくは最下段後頭部抉りの有無、⑦鍔前端覆輪の有無といった要素に注目して、検討を加えておきたい。

小札鉾留衝角付冑に付随する鍔は、すべて板鍔であり、横矧板鉾留衝角付冑にみられるような小札鍔を備えた例は知られていない。小札鍔は板鍔より新出の鍔であり、小札鍔の共伴という視点を通じて小札鉾留衝角付冑と横矧板鉾留衝角付冑の盛行時期の違いが示されるといえるだろう。小札鉾留衝角付冑に附属する板鍔は、3段構成（C形式、〔古谷1988〕）かもしくはそれ以上（D形式）のものが殆どである。3段構成以上の鍔に先行する形態として、1段構成（A形式）や2段構成（B形式）の鍔が知られている。こうした鍔を伴う製品は、古式の特徴を示しているといえるが、小札鉾留衝角付冑に附属する確実な事例は現状では知られない。ただし、大阪府珠金塚古墳南榔（B）例や、兵庫県雲部車塚古墳例などは古式の鍔が伴う可能性がある⁽³⁾。また、鍔が失われている京都府久津川車塚2・5号冑も、1段もしくは2段構成の鍔が伴っていたとみて矛盾はない。

板鍔の構成枚数が3枚であるか、4枚（もしくは5枚）であるかといった構成枚数の違いには有意な時期差は認めがたい。3枚以上で構成される多段鍔（以下、板鍔とする）については、次に述べるように袖鍔や後頭部抉りの有無、鍔前端覆輪の有無といった特徴に注目する必要がある。

⑥**袖鍔・後頭部抉り** 小札鉾留衝角付冑に伴う板鍔には、最下段の形状に細差が認められる。まず、板鍔最下段の形状に着目すると次のように分類できる。

- 板鍔A類 下端に特別な造作がみられないもの
- 板鍔B類 最下段の左右に別づくりの袖鍔が鉾留されるもの
- 板鍔C類 最下段の鍔の後頭部に抉りが入れられたもの

技法的な頻度は板鍔A類→板鍔B類→板鍔C類の順に推移していると捉えられる。ただし、眉庇付冑の事例であるが、鉾留技法導入期の製品と捉えられる奈良県五条猫塚古墳〔網干1962〕において、板鍔B類とC類が共伴していることから、板鍔B類とC類の出現期はほぼ同時で、鉾留技法導入期とみてよい。したがって、板鍔C類の存在をもって、新しい時期の鍔とは判断できない。

上下端が水平な板鍔A類は革鍔冑の一枚鍔からの伝統的形態といえ、小札鉾留衝角付冑が製作されたほぼ全段階にわたりみられる。袖鍔を伴う板鍔B類は、鉾留技法導入期に出現し、眉庇付冑の鍔とともに比較的古い段階の冑にみられる。その中心的な時期はⅢ式の衝角付冑が製作された

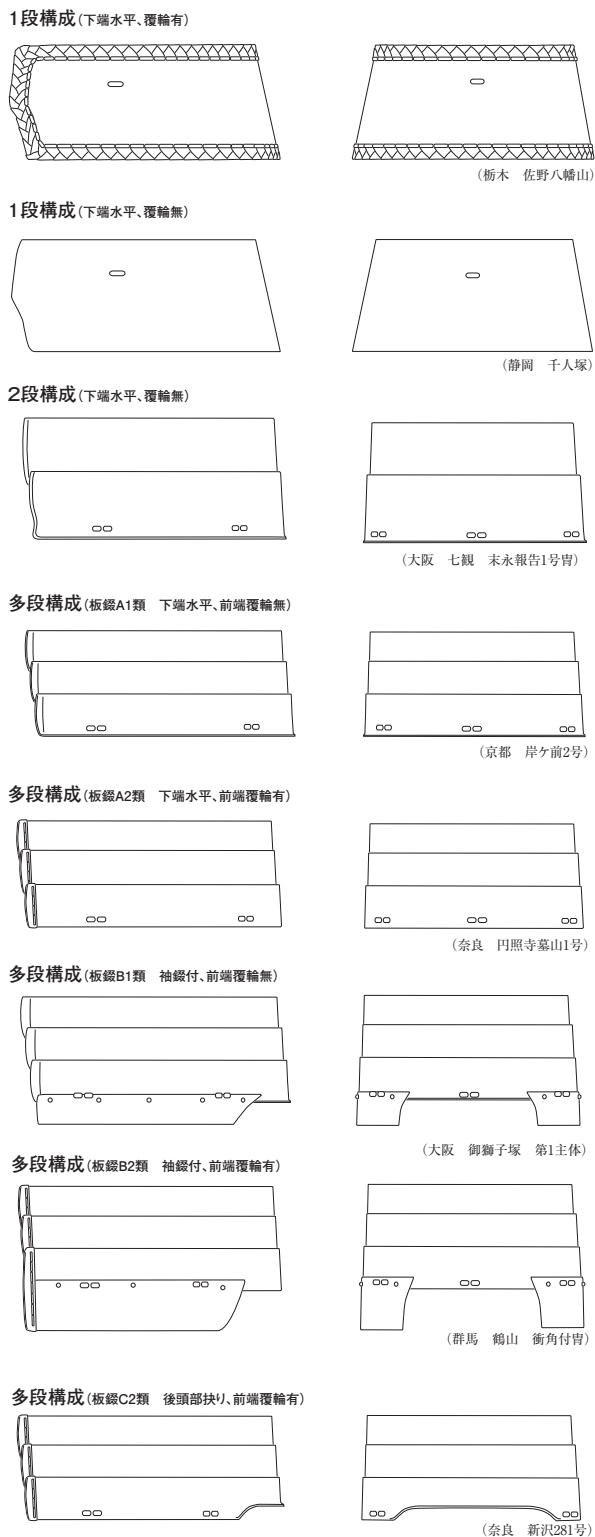


図4 板鍔の諸例

段階と捉えられ、袖鍔を伴う鍔は、IV式やV式への移行段階を境界に衰退するとみられる。板鍔B類は、鉾留冑に伴う板鍔の中でも古相を示す特徴といえるだろう。いっぽう、板鍔C類は、岡山県正崎2号墳例といったⅢ式の中でも比較的新しいと捉えられる製品にみられるほか、IV a式の新沢281号墳例〔伊達編1981〕に知られる。このほか、横矧板鉾留衝角付冑に対象を広げれば、板鍔C類は、IV式、V式に多く確認できる。以上のことから、板鍔C類は鉾留技法導入期に出現しているが、衝角付冑における盛行期は、Ⅲ式からIV a式の移行期以後であり、傾向としては板鍔の中でも新しい様相を示すものと判断できるだろう。最下段の後頭部に抉りが入られる板鍔C類は、袖鍔と最下段の鍔を一体のものと捉えれば、袖鍔を伴う板鍔B類と形態的に類似する。さらに、板鍔B類と板鍔C類の盛行段階が補完的であることから、板鍔C類は、板鍔B類の簡略形態として認識できる余地もある。

⑦鍔前端覆輪の有無 小札鉾留衝角付冑に伴う板鍔には、前端の特徴にも多様性が認められる。次のように分類しておこう。

板鍔1類 板鍔前端に革を用いた覆輪がみられないもの (C・D型式,〔古谷1988〕)

板鍔2類 板鍔前端に革を用いた覆輪を施したもの (C'形式)

板鍔前端に革を用いた覆輪が見られない板鍔1類には、板の端面を僅かに折り返すなどの造作がなされているこ

とが多い。Ⅲ式の小札鉸留衝角付胄に伴う板鋳の大部分は前端に覆輪をもたないことから⁽⁴⁾、板鋳1類は板鋳2類と比べて古い様相であるといえるだろう。いっぽう、前端に革覆輪を施す板鋳2類は、Ⅳ式やⅤ式に多く、新出の傾向を示している。その盛行期は、Ⅲ式からⅣa式への移行期以後と捉えられ、上述の板鋳B類(袖鋳)から板鋳C類(後頭部抉り)に大勢が変化する段階とほぼ一致する。

革覆輪は遺存状態が良好なものをみると革包覆輪であることが多い。鉄板の端部を僅かに折り返す細工と異なり、革覆輪を施せば鉄板の端部は切断したままの状態でも構わない。革覆輪を施す別工程が必要になるが、鉄板の細かい加工を避ける工夫とも解釈できる。鉄板加工の手間を省くという視点に立てば、鋳前端における革覆輪の盛行は製作技法の簡略化という文脈上で理解できる。

多段構成板鋳の分類 3段構成以上の板鋳には、3段、4段、5段といった違いがあるが、多段鋳として外観的にも機能的にも共通性が高い。鋳における段構成は分類の要素として重要であるが、3段以上の板鋳にかんしては、上述の下端形状や前端覆輪の有無といった要素の検討が製作段階をうかがううえである程度、有効である。表1では、小札鉸留衝角付胄にみられる板鋳を、先述の最下段の特徴と鋳前端覆輪の有無の分類を組合せ、A1類～C2類に分類して示した。変遷の大きな傾向として、A1類→B1類→A2類・B2類・C2類といった順序が指摘できるだろう。なお、多段鋳の検討は、横矧板鉸留衝角付胄や眉庇付胄の鋳を加えて検討する必要があることはいうまでもない。

属性分析の有効性 以上、小札鉸留衝角付胄を衝角底板の連結手法からⅢ式(上接式)、Ⅳa式(内接折曲式)、Ⅴa式(外接折曲式)、Ⅴb式(外接切断式)に細分し、①～⑦の属性分析によってその変遷について検討を加えた。ここまでの検討によって、小札鉸留衝角付胄の型式学的な特徴から想定した型式変遷、すなわちⅢ式→Ⅳa式→(Ⅴa式)→Ⅴb式という順序が妥当であることが理解できる(表1)。

②……………衝角部の諸特徴

衝角部の属性 上述の型式変遷の検討では俎上にあげなかったが、衝角底板や伏板先端形状、豎眉庇の形状なども衝角付胄の変遷や特徴をうかがううえで重要な属性である。とくに衝角底板の特徴は衝角底板連結手法と密接にかかわり、衝角付胄の各型式と明確に対応する。伏板先端の処理形状は大きく変遷の傾向が指摘できるほか、製作技法の系統差が反映されているとも捉えられる。同じく、豎眉庇の形状も、変遷の傾向がうかがえることに加え、形式をこえた特定の系譜が抽出できる可能性がある。以下、衝角底板、伏板先端形状、豎眉庇の各属性について検討を加えておこう。

衝角底板 衝角底板の形状は、胄本体との連結手法によってその形状が変化している。その形状は革綴衝角付胄を含めて、次のように分類できる。

衝角底板A類	底板本体と、三角形の底板底辺に連続する豎眉庇で構成されるもの
衝角底板B類	底板本体と、左右に広がる豎眉庇で構成されるもの
衝角底板C類	底板本体と、左右および側面上方に拡張部をもつ豎眉庇で構成されるもの
衝角底板D類	底板本体と側辺が折り曲げられ、左右に伸びた豎眉庇と一体にされるもの
衝角底板E類	底板本体と側辺が折り曲げられ、底辺に連続する豎眉庇と一体にされるもの

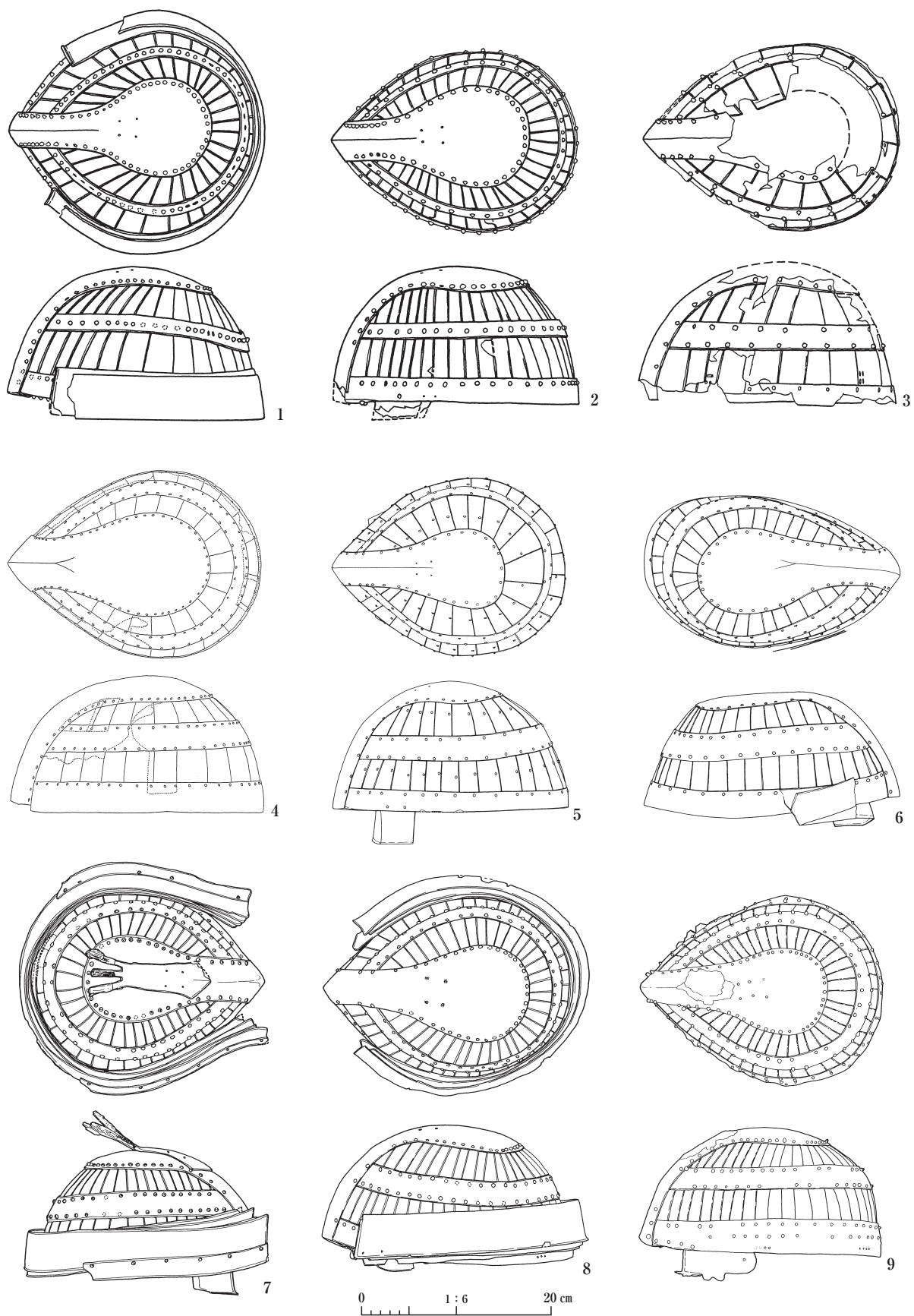


图5 小札鉄留衝角付胄集成図(1)

1. 七観 1913年出土5号胄 2. 久津川車塚1号胄 (1・2は竖矧板鉄留衝角付胄) 3. 久津川車塚5号胄
 4. 久津川車塚2号胄 5. 珠金塚南塚(B) 6. 珠金塚南塚(A) 7. 御獅子塚第1主体 8. 岸ヶ前2号 9. 堤当正寺

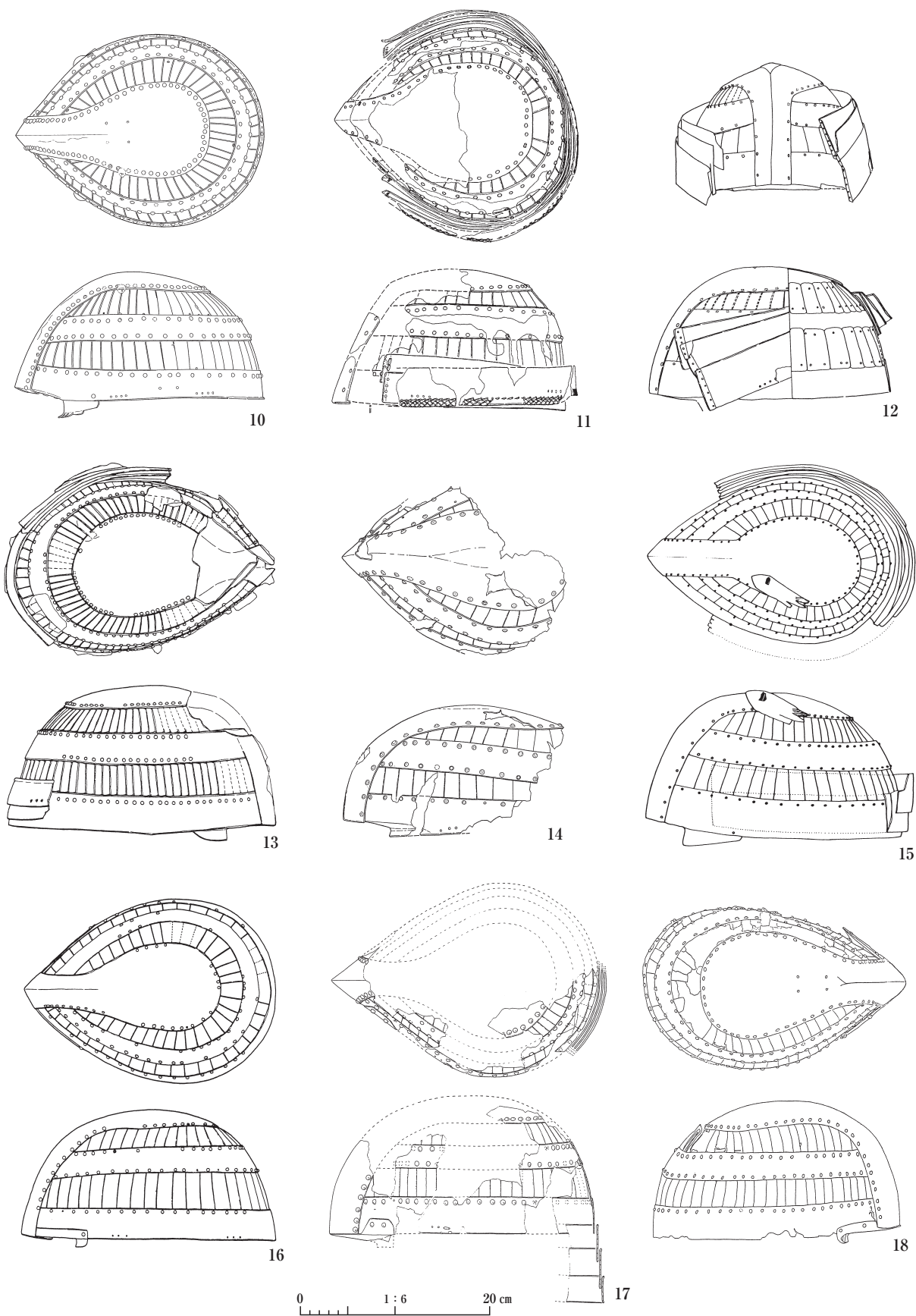


图6 小札鉾留衝角付冑集成图(2)

10. マロ塚 11. 正崎2号 12. 新沢281号 13. 堅山 14. 西塚 15. 法花堂2号 16. 鶴山
 17. 武具八幡山 18. 島内1号地下式横穴

衝角底板 A 類～D 類は豎眉庇の突出度が高いものが多いことに対し、衝角底板 E 類は豎眉庇の突出度が低い。また、衝角底板 B 類～D 類には豎眉庇左右の屈曲点が比較的明確であるものが含まれることに対し、衝角底板 A 類や E 類は豎眉庇左右の屈曲が不明瞭で、底面からみると直線的ないしは弧状を呈するものが多いという違いがある。

衝角底板の各類は、型式学的見地から、A 類→B 類→C 類→D 類→E 類の順で出現したものとして捉えられる。衝角付冑の各型式との対応関係は、衝角底板 A 類：Ⅰ式、Ⅱ式、Ⅲ式、衝角底板 B 類：Ⅱ式、Ⅲ式、衝角底板 C 類：Ⅲ式、Ⅳa 式、Ⅳb 式、衝角底板 D 類：Ⅳa 式、衝角底板 E 類：Ⅳa 式・Ⅳb 式・Ⅴa 式・Ⅴb 式である。各型式の変遷観と型式学的に想定できる出現順序に矛盾はない。

小札鉾留衝角付冑にかんしては、とくに衝角底板 C 類のあり方が注目できる。衝角底板 C 類は、豎眉庇左右側面に広がる部分を腰巻板と鉾留するために上方に拡張するもので、鉾留衝角付冑に特有の形態といえる。衝角底板 C 類は、大阪府珠金塚南塚 (A)、(B) 例にみられ、鉾留技法導入期において出現している。この形態の衝角底板は、側面の内側に衝角底板が当てられて腰巻板と鉾留される部分がつくりだされたもので、Ⅲ式 (上接式) とⅣ式 (内接式) の連続性を物語るものといえる。衝角底板 C 類は横矧板鉾留衝角付冑の事例であるが、岡山県随庵古墳例 (Ⅳa 式、内接折曲式) [鎌木・間壁・間壁 1965] や大阪府黒姫山古墳 11 号冑 (Ⅳb 式、内接式切断式) にもみられ、上述の想定を裏付ける。

伏板先端形状 衝角付冑のうち、Ⅰ式の一部、Ⅱ式、Ⅲ式、Ⅳa 式、Ⅴa 式は、伏板先端が底面に合わせて折り曲げられている。遺存状態が良好でなければ、細かな形状がうかがえないことから、検討できる事例に限られるが、伏板先端の形状を次のように分類しておこう。

- 伏板先端 A 類 両側から折り曲げられた先端が、重なるように折り曲げられるもの
- 伏板先端 B 類 両側から折り曲げられた先端が、重ならないように折り曲げられるもの
- 伏板先端 C 類 片側から折り曲げられた先端が 折り曲げられたもの

型式学的な変遷観からすれば、伏板先端の各類型は、A 類→B 類→C 類の順に出現し、最終的には、伏板先端が切断される形状に変化するとみられる。なお、先端が片側から折り曲げられる伏板先端 C 類は、底面が三角形を呈する場合と、方形をなす場合がある。とくに底面が方形をなすものは、外見上は伏板先端 A 類と区別がつきにくく、識別は困難である。福井県饅頭山古墳例 (Ⅲ式) [鈴木 2004b] が類例としてあげられる可能性があるが、確実な形状や、技法の特徴を把握できていな

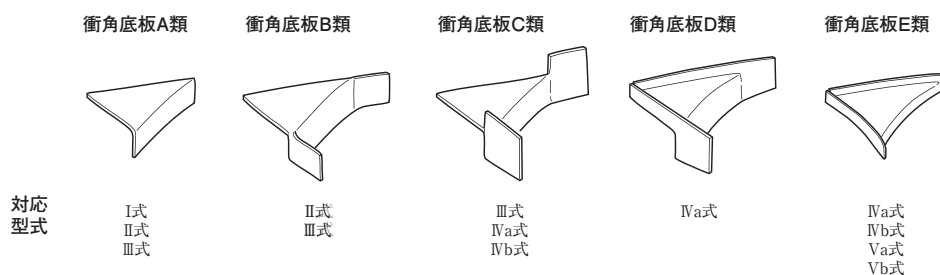


図7 衝角底板の諸例

いことから、本稿では積極的には取り上げない。

伏板先端 A 類はマロ塚古墳例をはじめⅢ式の個体の多くが相当し、伏板先端 B 類は福岡県新原・奴山 1 号墳例（Ⅲ式）〔石山編 1977〕や奈良県新沢 281 号墳例（Ⅳ a 式）が典型例としてあげられる。伏板先端 C 類は大阪府唐櫃山古墳例（Ⅳ a 式）〔北野 2002〕や、奈良県今井 1 号墳例（Ⅳ a 式）〔藤井 1984〕にみられ、後出する要素といえる。

上述の類例が示すように、伏板先端形状の各類は、型式学的な変遷観から導き出せる、A 類→B 類→C 類の出現順はほぼ首肯できる。衝角付冑の各型式との対応関係は必ずしも明確になしえないが、概ね、伏板先端 A 類：Ⅰ式、Ⅱ式、Ⅲ式、伏板先端 B 類：Ⅲ式、Ⅳ a 式、伏板先端 C 類：Ⅲ式、Ⅳ a 式と整理できるだろう。

豎眉庇形状 豎眉庇の形状も、衝角付冑の特徴をうかがう上で重要な要素である。大きくは、豎眉庇の高さが高いものから、低いものへ推移する傾向が指摘できる。また、豎眉庇の端部形状が下方に垂下するものと、端部が前面に折り曲げられるものが知られ、その正面観も多様である。これらの細かな属性をもとに細分ができるが、形態の差異が大きいことに注目したい。豎眉庇の形状にかんしては、緩やかな規範があるが、細部については製作者側の個性が反映されやすいと判断できる。豎眉庇の細差の分析によって、工人差や、工房差、特定の作風といった、編年の位置づけとは異なる事象が明らかにできる可能性がある。その一例として、豎眉庇の先端が鋸歯状にされる一群（以下、鋸歯状豎眉庇とよぶ）を取り上げておこう。

鋸歯状豎眉庇 鋸歯状豎眉庇をもつ衝角付冑は、三角板革綴衝角付冑に 3 例（大阪府豊中大塚 2 号冑〔柳本編 1987〕、徳島県恵解山 2 号墳例〔末永・森 1966〕、京都府宇治二子山北墳例〔杉本編 1991〕）、小札鋳留衝角付冑に 2 例（福岡県堤当正寺古墳例〔松尾編 2000〕、熊本県マロ塚古墳例）が知られている。これらの類例をもとに、その特殊な形状の意味と変遷について検討を加えておきたい。

鋸歯状豎眉庇をもつ衝角付冑の型式の差異を整理すると、豊中大塚 2 号冑がⅡ a 式、恵解山 2 号墳例と二子山北墳例がⅡ b 式、堤当正寺古墳例とマロ塚古墳例がⅢ式である。これらの製品の製作時期は明らかに差異があり、鋸歯状豎眉庇は、ある程度の期間にわたって存続していることが分かる。

このうち、最も古いと考えられる豊中大塚 2 号冑をみると、豎眉庇前面の突出が正三角形に近く、

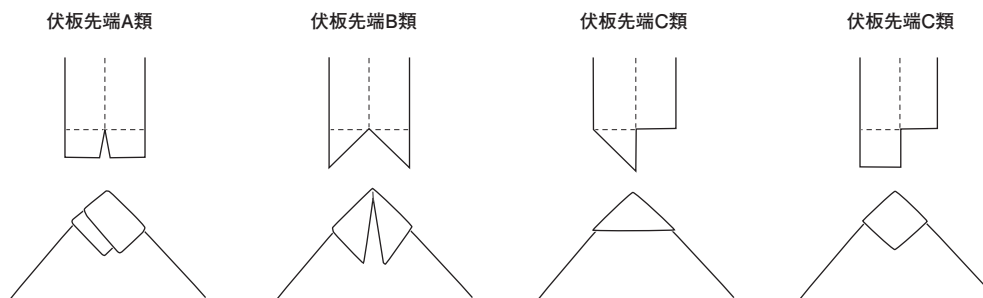


図8 伏板先端処理方法の諸例

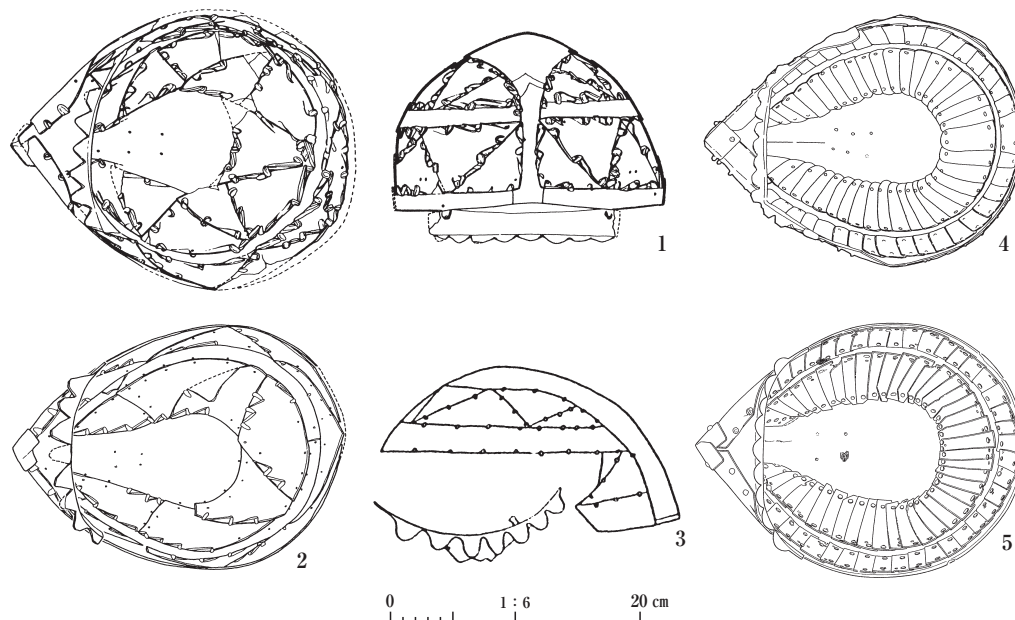


図9 鋸歯状縦眉庇をもつ衝角付冑

1. 豊中大塚2号冑 2. 宇治二子山北 3. 恵解山2号 4. 堤当正寺 5. マロ塚

各辺が直線的であることが分かる。正三角形に近い意匠の連続は、古墳時代の図像として多用されている連続三角文と共通し、甲冑の地板に用いられる三角板と共に辟邪の呪術的意味をもつものと捉えられる〔阪口1998〕。豊中大塚2号冑は、製品の特徴や共伴遺物からも鋳留技法導入期より1段階ほど遡る時期に製作されたものと捉えられる。必ずしも最古段階の事例とはいえないが、衝角付冑の製作が始まってから大きく時期を隔てず鋸歯状縦眉庇が登場していることが分かる。鋸歯状縦眉庇は、革綴衝角付冑が製作されはじめた比較的初期段階において、装飾的効果を高めるために創出された意匠といえるだろう。

豊中大塚2号冑例と近似した三角形の図像が表現されているものが宇治二子山北墳例であり、やや円弧を描くが恵解山2号墳例も鋸歯状の形状を志向しているものといえる。この2例は、三角板革綴衝角付冑の中では特異な3枚構成の板綴を備える点でも共通し、地板枚数などの属性や、綴の特徴などから、鋳留技法導入期の製作と捉えられるものである。

鋸歯状縦眉庇は、小札鋳留衝角付冑においてもみられるが、堤当正寺古墳例、マロ塚古墳例ともに、鋸歯状と表現するより、連続する円弧とするほうがふさわしい。双方ともⅢ式に位置づけられるが、堤当正寺古墳例は上下の小札数が一致し、衝角部に堅矧板を用いるなど、マロ塚古墳例と比べると若干、古相を示す。縦眉庇前面の形状が三角形から円弧に変化するのは、同時期に存在する眉庇付冑における眉庇の形状からの影響とも捉えられる。地板形状が三角板から小札に転換するように、鋳留技法導入後、冑の図像における連続三角文への志向が薄れていくことも関連しているだろう。鋸歯状縦眉庇の形状変化には、起源としての呪術図文から様式化した装飾模様への転換を読み取ることができる。

このように、鋸歯状堅眉庇をもつ衝角付冑には、製作時期の差が認められ、堅眉庇そのものの形状も変化している。この中で、宇治二子山古墳例と恵解山2号墳例は、革綴衝角付冑では異例といえる3段構成の鋸をもつ点で共通性が高く、工人や工房といったそれぞれの製作主体が互いに近い関係にあった可能が指摘できる。また、堤当正寺古墳例やマロ塚古墳例も、衝角底板のみならず、衝角部における腰巻板先端の折り返し技法、伏板先端の折り返し技法など、革綴衝角付冑と共通性が高く、革綴衝角付冑の形状を強く意識していることが分かる。現状では、鋸歯状堅眉庇をもつ衝角付冑にみられる細かな特徴どうしが、有意な関連を示しているとは、いいがたい。鋸歯状堅眉庇をもつ衝角付冑を製作した工人や工房が前作の記憶をたどり新作を製作したり、既存の鋸歯状堅眉庇を備えた衝角付冑をもとに類似品を製作したりすることは、充分想定できる。鋸歯状堅眉庇の採用が、特定の工人や工房の製作であることを示すというより、共通する「作風」を示すといった程度の解釈にとどめておくのが無難であろう。

③……………共伴遺物からの検証

型式学的検討から導き出した衝角付冑の変遷観を、共伴遺物の検討から検証するとともに、各型式の大まかな存続時期を導き出しておきたい。ここでは、小札鋌留衝角付冑を出土した同一施設内において共伴する甲（主に短甲）と鉄鏃、および馬具について取り上げておく。

共伴短甲 小札鋌留衝角付冑と共伴する甲は、ほとんどの場合、短甲である。短甲は革綴短甲が伴う場合と鋌留短甲が伴う場合がある。大まかには前者が古相、後者が新相を示していると判断できる。鋌留短甲にかんしては、小札鋌留衝角付冑との共伴時期が比較的長期にわたると考えられることから、三角板鋌留短甲や横矧板鋌留短甲といった形式差のほかに、製作段階差の傾向が捉えられる型式の違いも視野に入れておきたい。ここでは、鋌留短甲の型式差を明確に示した滝沢誠の変遷観を参照する〔滝沢1991〕。

小札鋌留衝角付冑と革綴短甲が組合う場合、組合う短甲のほとんどは三角板革綴短甲である。また、必ずしも組合せ関係が明確でないが、小札鋌留衝角付冑と革綴短甲が共伴する事例には、最古段階の鋌留短甲が伴うことがある。こうした事例は、いわゆる鋌留技法導入期にあたり、短甲においては革綴製品と鋌留製品が混在する傾向が強い⁽⁵⁾。こうした革綴短甲や最古段階の鋌留短甲が伴う事例の小札鋌留衝角付冑の型式は、最古段階のⅢ式であり、型式学的検討で捉えた変遷観と矛盾しない。

小札鋌留衝角付冑には、革綴短甲もしくは古式の鋌留短甲が共伴する事例のほかに、大型の鋌を用いる新式の鋌留短甲（滝沢Ⅱ式〔滝沢1991〕）が組合う事例も一定量認められる。新式の鋌留短甲が伴う事例を、共伴短甲からみた新相の一群として把握できるだろう。この事例に含まれる小札鋌留衝角付冑の型式は、Ⅲ式、Ⅳ式、Ⅴ式であり、Ⅲ式の存続期間の中において、新式の短甲が出現していることがうかがえる。Ⅳ式、Ⅴ式の中での前後関係は共伴短甲の様相からは明確になしえないが、型式学的な検討から導き出したⅢ式→Ⅳa式→Ⅳb式・Ⅴb式という出現順序は、否定されない。むしろ、Ⅳ式、Ⅴ式への変遷が比較的早い段階で達成された可能性が指摘できるだろう。

共伴鉄鏃 小札鋌留衝角付冑と共伴する鉄鏃は、筆者の編年におけるⅡb期からⅣ期のもので

表2 小札鉾留衝角付冑と共伴資料

資料名	型式	甲		鉄鎌 [鈴木 2003]	馬具	段階 群別	須恵器 併行 関係
		形式	型式 [滝沢1991]				
京都府 久津川車塚2号冑	(Ⅲ)	三革短5	革綴5	Ⅱb	—	第1 段階	TK 73
京都府 久津川車塚5号冑	(Ⅲ)	小札甲	小札甲				
大阪府 珠金塚南塚(A)	Ⅲ	三革短2, 革短	革綴3	Ⅱb	—		
大阪府 珠金塚南塚(B)	Ⅲ	三鉾短	(Ⅰa)				
兵庫県 雲部車塚	Ⅲ	革短	革綴	Ⅱb	—		
京都府 岸ヶ前2号	Ⅲ	三革短	革綴	Ⅱb	—		
福岡県 堤当正寺	Ⅲ	三革短	革綴	—	—	第2 段階	TK 216
奈良県 市尾今田1号	Ⅲ	三革短2, 三鉾短	革綴, Ⅰa	—	—		
福井県 饅頭山	Ⅲ	(三)革短	革綴	(Ⅱb)	—	第3 段階	TK 208 ~ TK 23
大阪府 御獅子塚第2主体	Ⅲ	三鉾短	Ⅰa	Ⅲ	鞍金具・心杏		
千葉県 姉ヶ崎二子塚	(Ⅲ)	—	—	Ⅲ	—		
熊本県 マロ塚	Ⅲ	横鉾短	Ⅱc	Ⅳ	—		
福岡県 新原・奴山1号	Ⅲ	鉾短	Ⅱ	Ⅳ	(木心輪鏡)		
奈良県 円照寺墓山1号	Ⅲ	三革襟短4	革綴	Ⅳ	轡・木心輪鏡		
		三鉾短3, 横鉾短	Ⅱb, Ⅱb/c				
兵庫県 法花堂2号	Ⅲ	三鉾短	Ⅰb	Ⅳ	—		
岡山県 正崎2号	Ⅲ	横鉾短	Ⅱb	Ⅳ	f轡・三環鈴(新)		
宮崎県 島内115号地下式横穴	Ⅲ	—	—	Ⅳ	内轡		
奈良県 新沢281号	Ⅳa	横鉾短	Ⅱb/c	Ⅳ	—		
宮崎県 堅山	Ⅳa	三鉾短	Ⅱ(Ⅱa)	—	—		
大阪府 唐櫃山	Ⅳa	横鉾短	—	Ⅳ	f轡・剣杏		
奈良県 今井1号	Ⅳa	鉾短	—	—	—		
福井県 西塚	Ⅳa相当	横鉾短	Ⅱ(Ⅱb/c)	Ⅳ	剣杏・木心輪鏡		
群馬県 鶴山	Ⅴa	横鉾短2	Ⅱa, Ⅱb	Ⅳ	—		
宮崎県 島内1号地下式横穴	Ⅴb	—	—	—	—		
茨城県 武具八幡山	Ⅴb	横鉾短	Ⅱc	Ⅳ	—		

凡例 (): 推定

甲, 馬具の略称

三革短: 三角板革綴短甲 革短: (形式不明) 革綴短甲 三鉾短: 三角板鉾留短甲

(三) 革短: 推定三角板革綴短甲 横鉾短: 横刃板鉾留短甲 鉾短: (形式不明) 鉾留短甲

三革襟短: 三角板革綴襟付短甲

心杏: 心葉形杏葉 木心輪鏡: 木心鉄板張輪鏡 f轡: f字形鏡板付轡 内轡: 内彎楕円形鏡板付轡

剣杏: 剣菱形杏葉

ある [鈴木 2003]。このうち、最古相を示すⅡb期の鉄鎌が共伴する小札鉾留衝角付冑はⅢ式に限られる。Ⅲ期の鉄鎌が共伴する事例もⅢ式に限定でき、Ⅲ式の小札鉾留衝角付冑における新古関係を共伴鉄鎌からうかがうことができる可能性がある。Ⅳ期の鉄鎌が共伴する事例は、Ⅲ式、Ⅳ式、Ⅴ式である。小札鉾留衝角付冑との共伴関係に限れば、Ⅳ期の鉄鎌と新相の鉾留短甲(滝沢Ⅱ式)は良好に対応しており、共伴短甲で示した小札鉾留衝角付冑の変遷観を補強するものといえる。共伴鉄鎌からの検討では、小札鉾留衝角付冑Ⅲ式の存続期間が比較的長期である可能性が指摘できるだろう。

共伴馬具 馬具は小札鉾留衝角付冑との共伴例が必ずしも多くないが、鑣轡や短柄の輪鏡などの中期古相の馬具と、f字形鏡板付轡や剣菱形杏葉、長柄の輪鏡といった中期新相の馬具との共伴

関係に注目しておこう。中期新相の馬具は、新式鋌留短甲（滝沢Ⅱ式）、鉄鎌Ⅳ期が伴う事例に併行してみられる。中期新相の馬具が伴う小札鋌留衝角付冑は、Ⅲ式およびⅣ式であり、Ⅲ式の存続期間において新相馬具が出現していたことが示されている。

変遷段階 以上の共伴遺物検討から、小札鋌留衝角付冑の型式変化を概ね以下のような三つの段階に分けて捉えておきたい。ただし、ここで指摘する三つの段階は、あくまでも小札鋌留衝角付冑の型式差と共伴遺物から導き出した時期差、すなわち古墳築造期の編年に相当するもので、衝角付冑の製作段階を厳密に示すものではないことは留意しなくてはならない。

第1段階 小札鋌留衝角付冑Ⅲ式 : 革綴短甲と古式鋌留短甲、鉄鎌Ⅱb期

第2段階 小札鋌留衝角付冑Ⅲ式 : 革綴短甲と古式鋌留短甲、鉄鎌Ⅲ期

第3段階 小札鋌留衝角付冑Ⅲ～Ⅴ式 : 新式鋌留短甲、鉄鎌Ⅳ期、中期新相馬具

これらの段階が示す須恵器との併行関係は、必ずしも明確でない。小札鋌留衝角付冑出土古墳に須恵器が伴う事例は少なく、直接的な資料どうしの比較から古墳の築造段階と須恵器型式を対応させることができない。ここでは、大まかな時期変遷の目安として、理念的な須恵器型式との対応関係を示しておきたい。中期古墳編年における須恵器型式の併行関係は、かつて鉄鎌の検討において示したものと同一である。表2に示すように、第1段階：TK73型式期、第2段階：TK216～ON46型式期、第3段階：TK208～TK23型式期と捉えておきたい。これらの各段階が示す大まかな年代観としては、第1段階：5世紀前葉（古墳時代中期中葉古段階）、第2段階：5世紀中葉（古墳時代中期中葉新段階）、第3段階：5世紀後葉（古墳時代中期後葉）としておこう。

現在までのところ、小札鋌留衝角付冑の最新相を示す事例は、茨城県武具八幡山古墳例〔増田編1986〕である。型式学的にも最も後出するⅤb式の本例は、最新相（滝沢Ⅱc式）の横矧板鋌留短甲が伴う。Ⅴb式は小札鋌留衝角付冑にはほとんどみられず、横矧板鋌留衝角付冑に多く認められる。小札鋌留衝角付冑は、Ⅴb式が盛行する段階ではごく少量が生産される程度で、ほどなくして生産が停止したと捉えられよう。

④……………マロ塚古墳例の編年的位置づけ

ここまでの検討において、小札鋌留衝角付冑の製作技法の変遷の大綱が明らかになった。最後に、検討をはじめの契機となったマロ塚古墳例の位置づけをしておきたい。

型式と諸属性 マロ塚古墳出土の小札鋌留衝角付冑は、革綴衝角付冑からの連続性が認められる上接式によって衝角底板を接続している。本稿で検討した衝角付冑の型式設定におけるⅢ式に相当する。衝角底板の形状は、革綴衝角付冑と共通する衝角底板B類（底板本体と左右に広がる豎眉庇で構成）、伏板先端形状は、古式の伏板先端A類（両側面の伏板先端が重なるように折り曲げられるもの）である。豎眉庇は高く、三角板革綴衝角付冑に起源が求められる鋸歯状豎眉庇をもつ。これらの属性は、Ⅲ式の小札鋌留衝角付冑の中でも古い要素といえるだろう。なお、本例は鋸が伴わず、その詳細を知ることができない。

小札使用枚数は、上下段、左右でそれぞれ異なる。後頭部の小札の位置も上下段で異なり、製作技法上の省略傾向がみられる。地板構成の点では、衝角付冑Ⅲ式の中でもやや新しい様相を示して

いるといえよう。

さらに、報告において詳述したように、本例に用いられた小札の厚さや形状の規格性が低く、未使用孔が多い。これは、本例に用いられた小札が特定の位置を充填する部材として個別に作り出されたものと考えより、ある程度まとまった量の小札が部品として存在し、製作者が小札を任意に選び出したことを示すものと捉える方が妥当であろう。3枚留鉾が各地板の下端側にみられることも、製作技術上の省力化が背景にあると解釈できる。これら、製作技法上の特徴は、本例が、鉾留冑の生産が本格化し、製作技術の簡略化が始まっている段階の一例であることを示している。

編年的位置 マロ塚古墳出土の小札鉾留衝角付冑は、製作技法上に簡略化傾向が認められるが、革綴衝角付冑と共通する古式の特徴も合わせもつ。小札鉾留衝角付冑Ⅲ式どうしを比較すると、小札枚数が上下で一致する福岡県堤当正寺例や、大阪府御獅子塚古墳第1主体例より新しいといえるものの、高く鋸歯状装飾をもつ眉庇の特徴や、後頭部小札が幅広にされないことなど、奈良県円照寺墓山1号墳例や岡山県正崎2号墳例と比べると先行する要素が多い。

以上のことから、本例の製作時期にかんしては、小札鉾留衝角付冑の第3段階（TK208～TK23型式期）よりも古く、第2段階（TK216～ON46型式期）の所産とみる方が妥当である。

いっぽう、共伴資料から、マロ塚古墳の副葬時期を探るなら、小札鉾留衝角付冑の変遷観における第3段階に位置づけられる。この段階は、新式鉾留短甲（滝沢Ⅱ式）[滝沢1991]や、定型化した長頸鉾が安定的に見られる鉄鉾組成（鉄鉾Ⅳ期）[鈴木2003]、f字形鏡板付轡や剣菱形杏葉などを主体とする中期新相馬具などが伴う。

副葬品相互の様相から導き出せるマロ塚古墳の年代観から比べれば、小札鉾留衝角付冑の製作時期が若干古いといえるが、その差異は、型式変遷の1段階程度の範囲に収まるとみられる。製品そのものの型式学的位置づけと、副葬品の組合せ関係から判断すると、マロ塚古墳出土の小札鉾留衝角付冑は、第2段階（TK216～ON46型式期）から第3段階（TK208～TK23型式期）への移行期にあたと捉えても矛盾はないだろう。この時期は、中期中葉から後葉に相当し、おおむね5世紀中葉から後葉の所産と推定できる。

⑤……………結 語

小札鉾留衝角付冑の検討を通じて、鉾留技法の導入から定着までの過程を概観した。小札鉾留冑の型式変遷には、革綴冑の製作技法や形態を引き継ぎつつ、鉾留冑として製作しやすい技法や形態へ変化する様相がうかがえた。形態変化の背後には、眉庇付冑の製作技法との関連もうかがえ、衝角付冑と眉庇付冑を横断的に検討する必要性が明確になったといえるだろう。また、本稿では詳しく触れられなかったが、小札鉾留衝角付冑の出現からやや遅れて登場する横矧板鉾留衝角付冑との関係も、看過できない。本稿で取り上げた属性分析や、共伴遺物による検証は、そのまま横矧板鉾留衝角付冑の検討にも応用できる。眉庇付冑の変遷を視野に入れ、小札鉾留衝角付冑と横矧板鉾留衝角付冑を総合的に検討することにより、鉾留技法の導入から定着の様相や、帯金式甲冑の終焉と古墳時代後期への移行過程をより具体的に知るができるだろう。

【付記】

脱稿後、中野和浩 2009『島内地下式横穴墓群Ⅲ 岡元遺跡』えびの市教育委員会、阪口英毅ほか編 2010『兵庫県立考古博物館研究紀要 第3号 雲部車塚古墳の研究』兵庫県立考古博物館が刊行された。とくに後書には本稿にかかわる内容が数多く掲載されているが、本論では十分に反映できていない。機会を改めて、論点を整理したい。

註

(1)——現在、外接折曲式(V a式)に該当する事例は、群馬県鶴山古墳例〔右島 1987〕が唯一例であり、安定的な型式として認識できない。ここに示した変遷観は、横矧板鋳留衝角付冑の型式変遷も視野に入れた上であるが、V a式の位置づけについては保留すべき要素が多いといえる。また、内接切断式(IV b式)と外接切断式(V b式)にかんしては、明確な前後関係をうかがいにくい。

(2)——堅矧板鋳留衝角付冑は、別稿で明らかにしたとおり、数系統に分離して捉える必要がある。小札鋳留衝角付冑と関連が高い系統は、堅矧板鋳留衝角付冑B類としたもので〔鈴木 2012〕、現在までに、京都府久津川車塚古墳1号冑と大阪府七観古墳末永報告5号冑の2例が知られる。以下、本稿で、「堅矧板鋳留衝角付冑」とする場合、この2例をさす。

(3)——珠金塚古墳南榔(B)例に附属する鋳は、報告書の図版〔末永編 1991: 図版 62, 64〕を観察する限り、3段程度の細板を鋳留したもので、可動性という点では1段構成の鋳と同等のものである可能性がある。この鋳については、報告書に図が示されず、本文にも記載がないため詳細は不明である。また、雲部車塚古墳例には、2段構成の板鋳が伴う可能性がある〔京都大学総合博物館 1997: p.27-53〕。ただし、この鋳は2段構成である確証がなく、小札鋳留衝角付冑に伴うものかどうか不明瞭である。

(4)——Ⅲ式に位置づけられる福岡県堤当正寺例は、板鋳の前面に小孔列が認められ、革覆輪が施されている可能性がある。ただし、本例の当該箇所には革が遺存していないことから、確実な覆輪をもつ例とすることが難しい。また、鋳留技法導入期の製作と考えられる奈良県五条猫塚古墳から出土した堅矧板鋳留蒙古鉢形眉庇付冑の鋳は前面に覆輪をもつものである。こうした事例が示すように、前面に革覆輪をもつ板鋳2類の出現は鋳留技法導入段階と同時であると捉えられる。ここでは、あくまで板鋳1類と2類における出現頻度の違いを指摘していることを強調しておきたい。

(5)——小札鋳留衝角付冑と革綴短甲および鋳留短甲が共伴する事例には、奈良県円照寺墓山1号墳例も加えることができる。ただし、この古墳に伴う革綴短甲は、三角板革綴襟付短甲であり、通常の短甲と同列に扱うことが難しい。共伴する鋳留短甲も最古型式でなく、鋳頭径が大きい新式の短甲〔滝沢Ⅱ式〔滝沢 1991〕〕である。このことから、円照寺墓山1号墳例は他の革綴短甲出土例と同列に扱わない。

(6)——奈良県新沢 281号墳例が小札鋳留衝角付冑と須恵器が伴う好例といえる。ただし、新沢 281号墳から出土した須恵器はTK208型式からTK47型式までの比較的長い存続時期を想定せざるをえず、単独の須恵器型式を直裁的に対応させることは難しい。

引用・参考文献

- 網干善教 1962『五条猫塚古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書 第20冊 奈良県教育委員会
 石山 勲編 1977『新原・奴山古墳群』福岡県文化財調査報告書 第54集 福岡県教育委員会
 今尾文昭・長谷川俊幸 1983「高取町市尾今田古墳群発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1981年度』奈良県立橿原考古学研究所 pp.439-451
 宇垣匡雅・高畑富子編 2004『正崎2号墳』山陽町文化財調査報告 第1集 山陽町教育委員会
 梅原末治 1920『久津川古墳研究』
 鎌木義昌・間壁忠彦・間壁霞子 1965『随庵古墳』総社市教育委員会
 北野耕平 2002「唐櫃山古墳とその墓制をめぐる諸問題」『藤澤一夫先生卒寿記念論文集』藤澤一夫先生卒寿記念論文集刊行会 pp.232-247
 京都大学総合博物館 1997『王者の武装—5世紀の金工技術—』

- 小泉裕司・樋口隆康 1999「久津川車塚古墳」『城陽市史』第三巻 城陽市 pp.100-125
- 小林謙一 1974a「甲冑製作技術の変遷と工人の系統(上)」『考古学研究』第20巻第4号 考古学研究会 pp.48-68
- 小林謙一 1974b「甲冑製作技術の変遷と工人の系統(下)」『考古学研究』第21巻第2号 考古学研究会 pp.37-49
- 阪口英毅 1998「長方板革綴短甲と三角板革綴短甲」『史林』第81巻第5号 pp.1-39
- 佐々木嘉和・渋谷恵美子ほか 2001『溝口の塚古墳』飯田市教育委員会
- 茂山 護ほか 1982『宮崎県総合博物館収蔵資料目録 考古・歴史資料編』宮崎県総合博物館
- 白石太一郎・白井久美子・山口典子編 2002『千葉県古墳時代関係資料』千葉県
- 末永雅雄 1930『円照寺墓山第一号古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第11冊 奈良県教育委員会
- 末永雅雄 1934『日本上代の甲冑』岡書院
- 末永雅雄編 1991『盾塚 鞍塚 珠金塚古墳』由良大和古代文化研究協会
- 末永雅雄・森浩一 1953『河内黒姫山古墳の研究』大阪府教育委員会
- 末永雅雄・森浩一 1966『眉山周辺古墳』徳島県文化財調査報告書 第9集 徳島県教育委員会
- 杉井健・上野祥史編 2012『マロ塚古墳出土品を中心にした古墳時代中期武器器具の研究』国立歴史民俗博物館研究報告 第173集 国立歴史民俗博物館
- 杉本 宏編 1991『宇治二子山古墳発掘調査報告』宇治市文化財調査報告書 第2冊 宇治市教育委員会
- 鈴木一有 2002「鉄製武器・武具における型式学的研究の視座」『考古学における認識と実測』考古学技術研究会 pp.11-23
- 鈴木一有 2003「中期古墳における副葬鉄の特質」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第11集 帝京大学山梨文化財研究所 pp.49-70
- 鈴木一有 2004a「下開発茶白山9号墳出土甲冑の検討」『下開発茶白山古墳群Ⅱ』辰口町教育委員会 pp.119-126
- 鈴木一有 2004b「北陸における甲冑出土古墳の様相」『下開発茶白山古墳群Ⅱ』辰口町教育委員会 pp.119-126
- 鈴木一有 2012「七観古墳1913年出土遺物の歴史的位置」『マロ塚古墳出土品を中心にした古墳時代中期武器器具の研究』国立歴史民俗博物館研究報告 第173集 国立歴史民俗博物館 pp.315-343
- 清喜裕二 1998「福井県西塚古墳出土品調査報告」『書陵部紀要』第49号 宮内庁書陵部 pp.71-90
- 滝沢 誠 1991「鉾留短甲の編年」『考古学雑誌』第76巻第3号 pp.16-61
- 伊達宗泰編 1981『新沢千塚古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第39冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 塚本敏夫 1993「鉾留甲冑の技術」『考古学ジャーナル』No.366 ニュー・サイエンス社 pp.22-26
- 野上丈助 1975「甲冑製作技法と系譜をめぐる問題点・上」『考古学研究』第21巻第4号 考古学研究会 pp.34-58,83
- 橋本達也 2003「副葬鉄器からみる南九州の古墳時代」『前方後円墳築造周縁地域における古墳時代社会の多様性』九州前方後円墳研究会 pp.197-218
- 平野 功 1989『町内遺跡群発掘調査報告書』小見川長文化財報告 第15集 小見川町教育委員会
- 藤井利章 1984「五条市今井1号墳発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1983年度(第2分冊)』奈良県立橿原考古学研究所 pp.361-366
- 古谷 毅 1988「京都府久津川車塚古墳出土の甲冑—いわゆる“一枚綴”の提起する問題—」『MUSEUM』No.445 ミュージアム出版 pp.4-17
- 松尾 宏編 2000『堤当正寺古墳』甘木市文化財調査報告書 第49集 甘木市教育委員会
- 松本正信・加藤史郎 1972『宮山古墳第2次発掘調査概報』姫路市文化財調査報告Ⅳ 姫路市教育委員会
- 松本正信・加藤史郎ほか 1986『法花堂2号墳』香寺町文化財報告Ⅰ 香寺町教育委員会
- 増田精一編 1986『武者塚古墳—武者塚古墳・同2号墳・武具八幡古墳の調査—』新治村教育委員会
- 右島和夫 1987「鶴山古墳出土遺物の基礎調査Ⅱ」『群馬県立歴史博物館調査報告書』第3号 群馬県立歴史博物館 pp.13-32
- 村井富雄 1974「衝角付冑の系譜」『東京国立博物館紀要』第9号 東京国立博物館 pp.2-216
- 門田誠一編 2001『園部岸ヶ前古墳群発掘調査報告書』佛教大学校地調査委員会
- 柳本照男 2005a「御獅子塚古墳」『新修豊中市史』第4巻 考古 豊中市 pp.315-317
- 柳本照男編 1987『摂津豊中大塚古墳』豊中市教育委員会
- 山田琴子 2002「小札鉾留衝角付冑と横矧板鉾留衝角付冑」『溯航』第20号 早稲田大学大学院文学研究科考古談話会 pp.16-36

図出典

- | | |
|----------------------|--------------------|
| 図1 筆者作成 | 13: [橋本 2003] |
| 図2 筆者原図, 作成 | 14: [清喜 1998] |
| 図3 1: [末永編 1991] | 15: [松本・加藤ほか 1986] |
| 2: [柳本編 2005a] | 16: [右島 1987] |
| 3: [松尾編 2000] より引用 | 17: [増田編 1986] |
| 図4 筆者作成 | 18: [村井 1974] より引用 |
| 図5 4: [村井 1974] | 上記以外は筆者原図 |
| 5・6: [末永編 1991] | 図7 筆者作成 |
| 7: [柳本 2005a] | 図8 筆者作成 |
| 8: [門田編 2001] | 図9 1: [柳本編 1987] |
| 9: [松尾編 2000] より引用 | 2: [杉本編 1991] |
| 上記以外は筆者原図 | 3: [末永・森 1966] |
| 図6 11: [宇垣・高畑編 2004] | 4: [松尾編 2000] より引用 |
| 12: [伊達編 1981] | 上記以外は筆者原図 |

(浜松市文化財課, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2011年7月25日受付, 2011年11月11日審査終了)

Transitions in *Kozane Byōdome Shōkaku-tsuki* Helmets and Their Significance

SUZUKI Kazunao

The purpose of this study is to examine the period of manufacture of the *kozane byōdome shōkaku-tsuki* (lamellar riveted and beaked) helmets found in the *Marozuka* Tomb. In my analyses I undertook a typological classification based on the manufacturing technology of the forepart of the *kozane byōdome shōkaku-tsuki* helmets, and through an analysis of the various attributes identified the manufacturing stages of each type. By noting the artifacts co-occurring in the tumulus with each type of *kozane byōdome shōkaku-tsuki* helmet, it was found that the manufacturing stages of these helmets can be divided into three stages. The first stage is the old phase of style III, the second stage is the newer phase of style III, and the third stage is the newest phase of style III along with all the other styles of IVa, style IVb, and Va. The types of the *kozane byōdome shōkaku-tsuki* helmets from the *Marozuka* Tomb were recognized as falling into the transitional period from the second to the third stage, and they are conjectured to have been manufactured during the middle part of the mid-Kofun Period (middle to late fifth century).

The manufacturing stages of the *kozane byōdome shōkaku-tsuki* helmets shift within the chronological range of the early to late fifth century. Through an analysis of the *kozane byōdome shōkaku-tsuki* helmets it was possible to identify the introduction of riveting techniques for the manufacture of iron armor and the process of their adoption. Within that process, even though there was continuity with the manufacturing techniques of the old *kawatoji* (leather-laced) helmets, a shift to the easier techniques of making the new *byōdome* helmets and their shapes is revealed. Behind the change in shape of the *kozane byōdome shōkaku-tsuki* helmets can be discerned a connection with the manufacturing techniques of the *mabisashi-tsuki* (visored) helmets. The analytical method and investigative point of view used in this study can be applied to a study of the *yokohagi-ita byōdome shōkaku-tsuki* (horizontal plated and riveted beaked) helmets. By maintaining an awareness of the transitions in the *mabisashi-tsuki* helmets and *yokohagi-ita byōdome shōkaku-tsuki* helmets, it is possible to comprehensively investigate the transitions in helmets employing riveting technology. This is the major result by which this study may be evaluated.

Keywords: *Marozuka* Tomb, *Shōkaku-tsuki* (beaked) helmet, analysis of attributes, riveting techniques, fifth century
